

出演者プロフィール

<p>飯原道代 劇団俳優座を経てナラティブシアター土の子を立ち上げる。ナラティブアクティングによる創造を実践している。水上勉「ブンナよ、木からおりてこい」谷川俊太郎「ワッハワッハハイの冒険」ほか 新劇俳優協会の詩の朗読 MINI FESTIVAL において最優秀賞を二度連続受賞</p>	<p>新堂雅之 (一糸堂) 映画、芝居好きが高じて、こまつ座演出部へ。その後汎マイム工房、ヤマト組(山本光洋)にてパントマイムを学ぶ。1982年ヨーロッパへ大道芸修行 2002年ヘプンアーティスト取得</p>	<p>高橋素子(一糸堂) 汎マイム工房に在籍 1992年退団。玉乃屋泡侍(藤原秀敏)さんのシャボン玉ショーに出演。ハチヤクモの生態を題材にした「自然科学おもしろ・おはなしパントマイム」にも取り組む。</p>
<p style="text-align: center;">2003年●一糸堂結成</p> <p>「モコ&シドロモドロフの大道芸」パントマイムや一輪車、ジャグリングなどを交えた、二人の息のあったコミカルなショーを繰り広げる。「東日本大震災子ども舞台芸術支援対策室の活動」を続ける。</p>		

物語る俳優の生きたことばが空間を変貌させるナラティブシアター。土の子の作品は俳優と音楽家で構成され、装置・メイキャップ・コスチュームなしで演劇空間を立ち上げていきます。場を共有することから、人と人との心をひらき、つなぎ、生きる力をひきだす作品づくりを目指しています。

2003年に出版された「茶色の朝」に掲載されている高橋哲哉さん(哲学者)のメッセージの抜粋です。

—フランク・パヴロフ「茶色の朝」に寄せて

色付きの自由

「なんだかんだ言っても、私たちはまだ自由じゃないか。権力の弾圧など受けたことはないし、毎日の生活でとくに不自由を感じることはない。いろいろな法律が国家統制を強めるとかいうけど、いまこの自由が近い将来なくなってしまうなど、とても想像できない」

こんなふうを感じる人にこそ『茶色の朝』の物語の意味を十分に考えてほしいと思います。私たちがいまも感じているこうした「自由」—それが、すでに相当程度「茶色」に染まった自由であり、「茶色の自由」でないと、だれが言い切れるでしょうか？

私たちがすでに「茶色に守られた自由」のなかにおいて、まさにそのために自分たちが染まっている「茶色」の濃さを実感できずに、「それも悪くない」と感じているだけだとしたら、どうなるのでしょうか？まさにそのために、自分たちを待ち受けている「茶色の朝」の衝撃を予感すらできなくなっているのだとしたら？

現代日本社会の状況を見るかぎり、近い将来、私たちが「茶色の朝」を迎えることはないと言断する自信は、残念ながら私にはありません。むしろそれは、十分ありうるシナリオのひとつだと思うのです。

「茶色の朝」申込書 (切らずにこのままFAXしてください)

氏名 _____ 大人 _____ 人・小中学生 _____ 人

〒 _____ 住所 _____ (建物名も記入してください)

TEL _____ FAX _____

申し込み確認後 チケットと郵便振替用紙をお送りしますので、お早めに入金してください。(振り込み手数料がかかります)

FAX申し込み：5670-9101 NPO 法人かつしか子ども劇場